The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哲学カフェ、その後
Author(s)	鷲田, 清一
Citation	臨床哲学. 1999, 1, p. 91-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

海外事情（２）

哲学カフェ、その後

鷲田清一

一九九八年三月、「カフェ・フィロ」の主宰者、マルク・ソーテが急死した。享年、五一歳。

彼の主宰していたカフェ・フィロの運動が、発祥地のパリからフランスの地方都市へ、さらにはジュネーヴへと広がってゆくとともに、ある私的な書簡のなかでのアウシュヴィッツについてのソーテの発言が問題となって「ル・モンド」が批判キャンペーンを張りだし、ジャーナリズムの論調がパリの風物詩――「カフェ・オ・レのエスプリで」などと形容されてきた――から危うい大衆運動への徴候を危惧するものへと変化しつつあったその時期に、ソーテは亡くなったのであった。

その死の二年近く前のことである。

朝の陽ざしとバスチーユ広場の喧噪とコーヒーの香りが漂うなか、カフェ・デ・ファールには二百人を超えるひとが溢れていた。日曜日、いまやおなじみとなったカフェ・フィロの開始だ。だが、その日はいつもと違い、どこか空気が張りつめている。カフェ・フィロの主宰者、マルク・ソーテが二日前、『ル・モンド』紙に厳しく批判されたからだ。それによると、彼は、ヒトラーのほんとうの目的は労働運動の根絶にあってユダヤ人殺害ではなかったこと、アウシュヴィッツのガス室の存在も疑ってかかることができると、ある私的な会話で口にしたという。十一時、ソーテが登場する。細身にジーンズとシャツ。五十代にはとても見えない。淡い青色の目は温かくも厳しい。《議論の必要はない。『ル・モンド』紙の「偽造された描写」には「読者の手紙」で答える。アウシュヴィッツ否定者といっしょくたにされるつもりはない》。これだけを表明すると、彼は代理人にマイクを手渡して立ち去った。「意気地なし」とつぶやくひとりの女性を除いて抗議する者はない。それどころか拍手喝采。彼のファンは多い。（以上は、Der kategorische Aperitif, *Frankufurter Allgemmeine*, 1996.7 の記述による。）

『ル・モンド』紙の批判を見るまえに、ことの起こりを少しふり返っておこう。カフェ・フィロがどういうものであったかについては、本書の姉妹書『ソクラテスのカフェ』（原著では同一の書物の別の章）にくわしいが、ソーテ自身がそこで語るよりももう少し広い観点から、この運動についてふれておきたい。

パリで賛否こもごも、しばらく前から話題になっているのが、いくつかのカフェで週

一回催されるカフェ・フィロという集いである。「フィロ」というのはフィロソフィーのフィロであり、つまりは《哲学カフェ》というわけだ。カフェに三々五々集まり、とくに身分を明かすこともなく、ファーストネイムで呼びあい、哲学のディスカッションをする。テーマは死、暴力、愛の残酷さ、核実験……とさまざま。ソーテがメンバーの意見を訊いて、その場で決める。ほとんど哲学のジャムセッションといった雰囲気らしい。この集い、拡大するいっぽうで、いまやフランス全土、百あまりのカフェに飛び火して、一種の社会現象にもなっている。《哲学カフェ》の発祥地となったカフェ・デ・ファールでこのカフェ・フィロを主宰しているマルク・ソーテは、別に「哲学相談所」も開設しており、「フィロ」というニューズレターも発行してきた。

こうした試みの原型は八〇年代のドイツにあった。一九八一年にゲルト・B・アヘンバッハという哲学者がケルン市の近くで「診療所」（プラクシス）を開き、哲学者によるカウンセリングをはじめたのだ。プラクシス（Praxis）というドイツ語は「実践」とともに「医院」をも意味する。この哲学的実践＝哲学医院の試みはしだいに多くの共鳴者を見いだし、翌八二年にはドイツ哲学的実践協会が結成される。七〇年代に西ドイツの哲学界で起こった《実践哲学の復権》と呼ばれる科学主義批判の運動が一段落したあと、哲学のリハビリテーション（「復権」、意地悪く読めば「社会復帰」）の余波のひとつとして、この試みは起こった。わたしも一度、集会には出かけたことがあったが、当時はプラクシスという言葉がそんな掛け詞で語りだされているとは想像もつかず、社会的なオリエンテーションを強くもった哲学の運動くらいに思っていた。

協会はその後、八七年に「アゴラ」という学会誌の発行を開始する。《哲学的プラクシス》の試みはその後、オランダからパリへ、イスラエルから米国、ノルウェー、南アフリカへと広がっていった。九六年には『応用哲学ジャーナル』が哲学カウンセリングの特集号を組んでもいる。このほかにも、《哲学カウンセリング》の国際会議も年一回開かれており、今年は第四回目、八月にその《哲学的プラクシス》の発祥地であるドイツ、ベルギッシュ・グラートバッハで開催される。

ドイツでのこの《哲学的プラクシス》の試みは、叢書のかたちで出版されているが、自治体の協力を得て街頭で市民の個人相談にのっているものから、会社のコンサルタント的なもの、さらには日本でいう自己啓発セミナーや新宗教まがいのものまで、種々雑多あって、たがいに連繋したひとつの運動体をなしているわけではない。さて、カフェ・フィロや哲学相談所といったアイデアに対しては、ファスト・フード・ショップにひっかけて、世紀末のお手軽な「ファスト・フィロソフィー」だとか「哲学の通俗化」だといった揶揄もある。哲学の問題というのは解決への道筋がすぐにはみえないようなものが多いし、したがって侃々諤々の議論をしたわりには結論が茫洋としていることが多い。

また、厳格な自己吟味にさらされることのない、耳あたりのよい「通俗哲学」（ポピュラー・フィロソフィー）——わが国では「水割り哲学」といわれることもある——と、哲学を分かりやすい言葉で社会に広めてゆくこと（哲学のポピュリズム）の区別というのも、案外つけにくいところがある。

もっとも、《哲学カフェ》は、西欧における哲学の伝統のなかに置いてみればそれほど意外な試みとも思われない。むしろ哲学が大学をはじめとする研究機関によって独占されている状態のほうが異様にみえる。路上で、あるいは集会で辛抱強く対話をし、みずからは一冊の書物も著さなかった哲学の父・ソクラテス、その伝統をもち、ロゴス（ことば、論理）の力を深く信頼し、会話を社交と教養の基礎と考えて、初等教育の段階から哲学教育を重視してきたそういうひとたちが、哲学の原点復帰を対話というかたちで試みようというのは、自然の勢いというべきものである。現に、哲学カフェは哲学におけるダイアローグ（ロゴスを分けあうこと）の復権であり、《哲学カウンセリング》は（ソクラテスの産婆術がそうであったように）各人による自己理解や自己探究の論理的な支えとなることをめざしている。

哲学といえば、日本では、なにかむずかしい漢字だらけの思考というイメージがあって、抽象的でとっつきにくいものという印象が強い。だから哲学者にカウンセリングを受ければ、悩みはいっそうこじれ、気分は落ち込むどころか陥没してしまうのではないかと不安がられるのは、たぶん目に見えている。じっさい、哲学にはなにか霞を食って生きるようなイメージがあって、「浮世離れ」していることがまるで美点であるかのように受け取られてきたふしすらある。その異様さを気づかせようときつい文章を書いたドイツ人の哲学者がかつていた。カール・レーヴィットである。彼は、この地では哲学者は二階に住んでいて異国の哲学理論をまるで干し物のように並べて楽しんでいるが、その同じ人物が一階で語り考えていることとなんの結びつきもないことの異様さについて、口を酸っぱくして語った。そこには、彼ら日本人が学ぼうとしたヨーロッパ文明がなによりも重視した〈批判〉の精神、自己吟味の精神が欠けている、と（『ヨーロッパのニヒリズム』のなかの「日本の読者に与える跋」参照）。

ところが他方で、時代が現在抱え込んでいる困難はとても「哲学的」である。そんな感触がある。

《人間は、われわれの思考の考古学によってその日付の新しさが容易に示されるような発明にすぎない。そしておそらくその終焉は間近いのだ》。このフーコーの言葉とともに、〈人間〉という概念の自明性に楔が打ち込まれたのは、日本では七〇年代のことだと思う。八〇年代には、女性論、子ども論、老い論といった、社会を中心と周縁とに隔てるもの、そうした社会的差異の形成への真剣な問いなおしが起こり、書店にはそういうテーマの

コーナーがいっぱいできた。そしていま、クローン羊の誕生から複製人間の出現が技術的には秒読みに入ったというわけで、三たび「人間」概念への問いかけがなされるようになっている。個人の同一性とはなにか、その存在のかけがえのなさとは、主体であるとは……？

それだけではない。民族紛争、環境汚染、臓器売買、遺伝子レベルでの生命操作、老人介護、失業、性差別、セクシュアリティの変容、宗教的狂信、アルコール依存症、家族の危機、公共性の再構築などというふうに、自然との関係、人びとの共存、そして「生きがい」やアイデンティティといった個人の支えとなるものをめぐって、そのもっともベーシックな次元で、解決の道筋がにわかには見えないような難問を突きつけられていると言っていい。〈わたし〉とはだれか、倫理とは、国家とは、民族とは、性とは、老いとはなにかという、そのような「哲学的」な問題に、だれもが正面から向きあわずにはすまされなくなっているのだ。

社会のそういう困難を前にして哲学にいったい何ができるのか――これがおそらくは《哲学カウンセリング》という、哲学者をアカデミズムの内部からその外部へと連れだす試みを駆りたてている問いである。思考の技法としての哲学が、研究室でひとりで「書く」という行為から他者と「語らう」という場面へと、みずからを先祖がえりさせはじめたのだ。先祖がえりというのは、ソクラテスは路上で、あるいは広場で、ひとと言葉のキャッチボールをするばかりで、じぶんでは一冊の著書も遺さなかったからだ。ソクラテスがおこなったのは、他人の言葉を受けとめ、投げかえし、相手がみずからことがらの道筋（ロゴス）を見いだすのを助けるという、いわゆる産婆術というものである。《哲学カフェ》や《哲学カウンセリング》の運動はどうもそういう哲学の原点に戻ろうという志をもっているらしい。哲学の本質をロゴスを分かちあうこと（ダイアローグ）と考え、会話と言論を社交と教養の基礎と考えてきた西洋社会らしい対応であると思う。

そういうなかで、生命倫理だとか環境問題だとかに哲学が発言を求められるようになって、アメリカを中心に「応用哲学」とか「応用倫理学」とよばれる試みが出てきたのはご存じのことと思う。わたしはこの「応用」（アプリケーション）という術語に抵抗があって、哲学がどうして社会のさまざまな困難な現場に出かけていかなければならないのだろうと思った。もともとそこから出てきたし、いまもそうであるはずなのだ。それが現場から離れたところで「応用」以前に純粋理論として可能であるかのように思うほうが問題なのではないのか、と。

わたしには、じつはもうひとつ、いまの哲学的言説で気になることがある。昨今の日本の哲学的表現の世界をみていると、この国において「難解」という哲学のイメージを植えつけることになったあの晦渋な表現を離れてできるだけ平易な表現、日常語でおこ

なう思考を意識的にこころがけているようである。このことじたいは望ましいことだと思う。精神が内蔵している抽象力が、日常の表現そのものを抽象的な表現へと押し上げ、その倫理によって現実を評価し、判定するのが、〈哲学〉というものだからである。〈哲学〉にはそういう日常言語そのものの自己批判という契機が含まれている。そしてそれが、平易な表現によってめざされることであって、言葉を緩めるということとは反対のことなのである。が、このことを誤解している文章が少なからずあるような印象をわたしは拭いきれない。

そういう思いもあって、わたしはじぶんの職場で、仲間たちとともに《臨床哲学》という試みをはじめた。医師、看護婦、ソーシャルワーカー、カウンセラー、学校教師ら、他人を「世話」するひとたちが、その現場で、死とは、家族とは、性とは、教えるとは、正しさとは……といった（哲学的な）問いにぶつかるときに、その思考のもだえをともにする作業を、《臨床哲学》ととりあえず呼んでいる。シンパシー（共感）はもともと「苦しみを分ける」という意味だが、ここではそれを「ともに考える」というかたちでできないかと思ったのだ。もちろん、じぶんは安全地帯に身を置いておいて、現場に立つひとを後方支援するというのは、ただの言い訳ではないのかという批判はあるだろう。他方、哲学は議論をとおした行為であって、問題を取りだし、解決へといたる思考の道筋をともにさがしもとめる場こそ哲学にとっての現場なのだという再反論もありうる。いずれにせよ、哲学者としてであれ「時代の子ども」としてであれ、わたしたちは最終的な答えが見いだせるか否かすらさだかではないような問いに身をさらしていることはまちがいない。そういえば、かつてヘーゲルは『法の哲学』のなかで、哲学とは「思想のなかに捉えられた時代」であると書いていた。

『フランクフルター・アルゲマイネ』紙にカフェ・フィロ論を書いているティエリー・シェルヴェルは、この本についてこんなふうにも書いている。

マルク・ソーテはこの本では、ソクラテスからニーチェ、またトロツキー、スターリン、ヒトラーなど、西洋哲学や寄せ集めの歴史について冒険的な語りをくりひろげている。「ガス室発言」が失言とは思えないほどに、である。そして西側の「商人社会」を診断する（だから哲学史の書物としてはめずらしく、アダム・スミスやリカード、マルクスへの言及が多い）。現代をソクラテスが生きていた時代の反復とみなし、ひいては、市民戦争の到来を予言する。自分自身がソクラテスの再来であり、哲学カフェはポリスが理性を取り戻しうる唯一の場所であるかのようにほのめかしながら、である。はたしてソーテは教育的エロスをつうじて人びとを自己認識に導く発問者なのか、それともただの予言者にすぎないのか、と。

結論がなくても議論を戦わせたことに自己満足があるらしいこのカフェでは、頻繁に

倫理的な問題がディスカッションのテーマになる。これが厳しい自己吟味をへない無反省な煽動的議論にならない保証はいったいどこにあるのか。哲学カフェが機関として自己検証する場はどこにあるのか。こういう視点から、ソーテが哲学のテクストの読解を撥ねつけていることに危惧をしめすひともいる。根気づよく過去の哲学テクストの議論とつきあい吟味する努力なしに、口に泡とばして議論することが、表面的な議論で終わる可能性があるというのである。それになによりも先入見を排するところに哲学の精神があるはずなのに、その自己批判の鏡として古典的なテクストを使用することを禁じるところでは、ひとは単純な自己満足に陥りやすい。

哲学カフェが内蔵するこうした問題とともに、もうひとつ、わたしたちがこの試みを論じるにあたって考えておかねばならないことがある。カントも言っていたように、「哲学は（歴史的な知識でないかぎり）けっして学びうるものではないのであって、理性にかんしていえば、せいぜい哲学すること（フィロゾフィーレン）を学ぶことができるにすぎない」。が、そうなると、話すこと、聴くこと、考えること、つまりは言葉の力がわたしたちの社会においてもつ意味について、まずつきつめて考えることをしておかねばならないだろう。哲学とは何かという問いとともに、哲学的に思考し議論するその言葉が、いま、「フィロソフィー」の伝統をもたないこの国でようやく問われはじめたとも言えるのである。ただし、《哲学カフェ》や《哲学カウンセリング》の話を聞いたからといって、それをまた直輸入しようとすれば、レーヴィット先生は「性懲りもなく……」と、ますます嘆息を深くされるにちがいない。わたしたちはむしろ、いまはじめて問わねばならないのだ。日本語というものを媒体とするこの文化のなかで、哲学的思考とはなにを意味するのか、と。

論理の力についてはもちろんだが、さらに語りの技や言葉の遊びをもふくめて言葉がわたしたちの生活においてもつ力について、あるいは話すこと、聴くことがわたしたちの社会でもつ意味について、一度はつきつめて考えておかないと、いつまでたっても〈哲学〉という名の思考は二階の部屋につり下げられたままだろう。そしてついには西洋学以上のものにはなりえないだろう。

「哲学」が日本に輸入されて百数十年、「哲学」とは何かが、いまようやく自分たちの言葉で問われるべき段階にきたような気がする。

（マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ・Ⅱ』解説、紀伊国屋書店、1998）